岡山藩士古家氏の奉公書

吉原　健一郎

ここに紹介する史料は、古家有信氏の所蔵にかかわる「先祖書　御奉公書」である。その内容は大別して三部に分かれている。まず第一の部分は古家氏の系図である。第二の部分は先祖書ないし奉公書で二部に分かれている。第三の部分は「書上留」であり、これも二部に分かれる。以下、そのそれぞれについての概略を記しておこう。

はじめの系図は、先祖である松崎市郎右衛門にはじまり、左のように現在までの系譜が記されている。

松崎市郎右衛門

(1)古家市右衛門　法号徳安

(2)古家喜右衛門徳之　松崎甚右衛門・惣次郎　法号夏月蓮浄
(3)古家喜兵衛徳録
(4)古家喜平治之紀　守左衛門・之庵（平左衛門）　法号高堅院宗樹　喜兵衛の弟
(5)古家源次郎　有鄰・清作・平左衛門　法号了心院恵観
(6)古家巳之介　有忠・平左衛門　法号是即院証道
(7)古家清作　有孝　法号貞実院徳厚
(8)古家喜馬太　有孚　法号真照院日喜信士
(9)古家有吉　法号清穆院苔軒信士
(10)古家有信

古家市右衛門より現在の有信氏まで十代を数える家系である。右のうち（　）内は系図には記されていないが、以下の史料で補ったものである。

つぎに先祖書・奉公書であるが、最初の部分は(2)喜右衛門徳之の記述したものである。喜右衛門は祖父の病死後、父の代に浪人となっていたが、作州津山の森美作守に仕官することができた。しかし、これも森氏の失脚ののちは浪人となり、江戸に出て再仕官の道を求めねばならなくなっている。そして、岡山藩主松平越後守に仕えてから、一時的な危機もあったが、それを乗り越えて安定している。喜右衛門は少身で奉公したが、閑谷学校の役人として努力し、たびたび加増をうけ、切米二三俵（二

三石）まで昇進している。この奉公書は享保十四年（一七二九）に作成されたものである。

つぎの「自分御奉公之品覚書」は、喜右衛門の子(3)喜兵衛の弟(4)喜平治の奉公記録である。享保十七年の新田方勤務にはじまり、勘定方の畑を進んでいる。この間、延享元年（一七四四）には江戸屋敷勤務となり、同三年帰国している。同五年には朝鮮使節の往復の御用として牛窓へ出張した。また、宝暦五年（一七五五）にも江戸勤務となり、同六年の帰国の途次には伊勢参宮ののち、大坂から舟便で岡山へ帰っている。さらに、同十年より同十一年にかけて江戸へ勤務したが、これは将軍宣下等にかかわる饗応の惣膳奉行という大役であった。翌十二年には忰の(5)源次郎（有鄰）が勘定所見習を命ぜられている。宝暦十三年には社倉御用・作廻方御用を兼任するなど活躍している。この結果、安永五年（一七七六）には一三〇石の知行を得て勘定方頭取を命ぜらるるまでに昇進した。

最後の「書上留」は、以上の奉公書と重複することも多いが、その都度書上げられた奉公書等の写である。前半は(4)喜平治の書上で、享保十七年（一七三二）から明和六年（一七六九）までの内容を七度に提出したものである。このほか宗門改書上など数通の書上写が記録されている。後半は清作（源次郎）の書上であり、宝暦九年（一七五九）から文化元年（一八〇四）までの内容で九度に分けて提出されたものである。宝暦九年の勘定所見習三人扶持から出発し、父と同様に勘定所畑を進んだ。天明五年（一七八五）には父の知行のうち切米六〇俵（六〇石）を相続した。寛政四年（一七九二）には寄奉行に昇進している。同十二年には勘定所頭取役に任命された。翌享和元年には忰の(6)巳之介が勘定方

雇を命ぜられた。この間、清作は明和四年（一七六七）―同五年、安永二年（一七七三）、安永七年（一七七八）―同八年、天明三年（一七八三）―同四年、寛政二年（一七九〇）―同三年、寛政九年（一七九七）―同十年の六回にわたり江戸での勤務を行った。

以上は、本史料に関する概略であるが、なお詳細に検討することによって、岡山藩における家臣の勤務実態がより明確になるのではないかと考えている。なお、古家有信氏所蔵の「御奉公書控帳」は、右に続き(6)巳之介および(7)清作の奉公書写であるが、枚数の制約もあるので次の機会に紹介したい。内容は文化元年（一八〇四）から明治三年にわたり、本史料との関連では、文化二年に清作（平左衛門）が代官御用に就任したことなどが記されている。

なお、本史料の解読にあたり、「書上留」は片倉比佐子氏（東京都公文書館）の御協力を得たことを付記しておく。また、本史料の公開を快く許された古家有信氏の御好意に感謝する次第である。

（表紙）

「先祖書
御奉公書
古家」

一、某　松崎市郎右衛門　生国摂州大坂之産因州鳥取松平相模守ニ仕て歩行を勤　同所死

某　古家市右衛門　因州鳥取之産作州津山ニ至浪人ニて居候て同所死　法号徳安

徳之　古家喜右衛門　作州津山之産　享保十七年備前岡山ニ死す　才　同国塩見町本行寺葬法号夏月蓮浄　昭和二年八月五日妙林寺山ニ改葬

女子

徳録　古家喜兵衛　作州津山之産　備前岡山仕宝暦十庚辰年十一月廿一日死　葬本行寺法号本覚蓮日

女子　母備前岡山富山氏之女　享保十年六月産
宝暦四甲戌四月廿六日死　法名林月道秀

某　古家勘次郎　母備中倉敷之産　谷田氏を以親とす
享保十八年四月十七日死　本行寺葬
勘次郎ハ享保十五年六月十四日ニ産

女子　母勘次郎ニ同　享保十八年正月晦日産　品川与右衛門室

某　古家吉之丞　母荒木氏之女　寛保元辛酉年十一月朔日
備前岡山生　後林氏之家を続

某　古家達吉　母吉之丞ニ同　寛延元戊辰年
八月十三日備前岡山生

女子　米　母吉之丞同　宝暦四甲戌

之紀　古家喜平治　正徳三巳年三月廿六日備前岡山産
之庵と改　妻堅正院仙樹　文化八年四月廿五日卒
寛延四辛未　実名守左衛門
天明四辰十二月廿五日死　本行寺ニ葬
法号高堅院宗樹
昭和二年八月五日妙林寺山へ改葬ス

某　古家源次郎　延享四丁卯年六月廿八日　因州
備前岡山生　母高原氏之女
文化四丁卯年正月十七日卒ス　法号了心院恵観
塩見丁本行寺葬
源次郎有辭　妻貞信院妙観　天保十八月三日卒
清作と変名　寛政七卯年頃より平左衛門ト変名
昭和二年八月五日妙林寺山へ改葬

女子　千世　寛延三庚午年七月十一日備前岡山生
源次郎と同母　荒木武右衛門室

女子　銀　宝暦三癸酉年正月廿一日備前岡山ニ産
源次郎と同母　和田構右衛門室

女子　久　同六丙子年十二月廿日同断
源次郎と同母　高原平次郎室

某　古家巳之介　天明五乙巳年七月六日夜備前岡山天瀬網縄ニ而産
母大平氏之女　実名有忠　天保元庚寅年頃より平左衛門と変名
安政四丁巳年五月四日七十三歳ニ而卒ス　法号是即院證道
御野郡石井山ニ葬　妻ハ自性院妙敬　嘉永四年九月廿三日卒

女子　小磯　天明七丁未年十二月九日備前岡山西川之産　母巳之助と同　高倉七左衛門室
文政十二己丑年七月八日死　法号凉泉院湛然智海

女子　千代　享和三癸亥年備前岡山西川之産　母巳之助同
宇津木半太夫室　文政十二己丑年九月廿五日死ス　邑久郡
磯上村中大塚ニ葬　法号秋圓院光林妙月

女子　美代　文政八乙酉年十月晦日　備前岡山西川之産
母古田氏女　瀬川則久之室　明治五年八月二日卒ス　法号頓覚自貞

某　古家清作　文政十二己丑年六月二日七ッ半時備前岡山西川之産
母美代と同　実名有孝　明治十年二月六日次男有孚家督譲隠居
明治二十年三月十日卒ス　法号貞実院徳厚　岡山県備前国御野郡
妙林寺山ニ葬　妻竹藤次右衛門女八十　明治四十五年七月三日卒
東京ニ於テ火葬岡山妙林山ヘ埋葬ス　法号本厚院妙貞

某

古家嘉平太　天保五甲午年十月廿七日備前岡山西川之産
母美代と同　実名有基　嘉永四辛亥年十月九日早世して
死　行年十八歳　法号浄心院道祐　妙林山ニ葬

某

古家瀧之丞　嘉永二己酉年六月十七日夜九ッ時過備前岡山西川之産
母斎藤貞篤之女　実名有レ之　安政三丙辰年八月朔日行年八歳早世卒ス
法号智圓童子　御野郡妙林寺山葬

某

古家喜馬太　安政五戊午年六月十九日七ッ時過備前岡山西川之産
母滝之丞同シ　実名有字　昭和四年七月二十日東京府下大崎にて
卒す　法号真照院日喜信士　柏木常圓寺ニ埋葬
妻ハ大村正次女雪　明治四十三年十月十三日卒　東京豊多摩郡
柏木常圓寺ニ埋葬ス　法号真妙院妙玄信女

女子

鶴　文久元辛酉年六月三日九ッ時過備前岡山西川之産
母ハ滝之丞同シ　大石良勝之室　昭和七年古家へ帰リ翌年四月
二十日午后卒　常圓寺に骨葬ス　法号福相院妙鶴信女
行年七十三歳

某

古家銕吉　元治元甲子年十二月十二日卯刻岡山西川産
母ハ滝之丞同シ　明治六癸酉年七月三十日行年十歳早世ス
法号琢玄童子　妙林寺山葬

某

古家有吉（ウキチ）　明治二十七年二月十二日午前三時過岡山西川産
母ハ大村正次長女　実名有吉
昭和十六年八月東京都世田谷区赤堤町一ノ一五三於テ死去
法号清穆院苔軒信士　常円寺埋葬

女子　鷹　明治二十九年四月十七日午前二時過岡山西川産
母ハ有吉同シ　大正　村山正修ヘ嫁ス

女子　恵　明治三十二年三月十三日午后十一時東京浅草区橋場町産
同年三月十五日午后十一時過早世　東京浅草区吉野ノ常福寺ヘ
火葬　母ハ有吉同シ

女子　冨　明治三十四年三月二十六日午后九時浅草区橋場町池田
侯爵邸ニて生ル　母ハ有吉同シ　大正三年八月八日午前一時二十分
東京市浅草区猿若町一丁目壱番ニテ死去　東京府下豊多摩郡
淀橋町角筈常円寺ヘ土葬ス　法号妙晴童女

女子　芳　大正十四年三月二十八日東京府大崎町下大崎池田侯爵邸ニ生ル
母ハ佐藤熊五郎ノ二女鶴野　昭和四年十二月七日午前東京市世田谷
区赤堤一ノ一五三於テ死去　歳五ッ　法号妙芳童女　常円寺埋葬

女子　立　昭和二年一月八日午后五時東京府大崎町下大崎池田侯爵邸内ニ
生ル　母ハ芳同シ

女子　房　昭和四年七月二十四日午前四時二十分東京府下大崎町にて生る
母ハ立に同じ　昭和二十二年八月三日東京都世田谷区赤堤町一ノ一
五三於テ死去　十九歳　宝珠院妙房信女　常円寺埋葬

某　古家有信　昭和六年五月二十九日世田ヶ谷赤堤町一ノ一五三にて
午后九時に生る　母ハ佐藤熊五郎ノ二女鶴野

某　古家有年　昭和九年十月二十五日午后九時赤堤町一五三に生る
母ハ有信に同シ

一、祖父松崎市郎右衛門と申候、生国摂州大坂之者ニて御座候、因州鳥取ぇ参、松平相模守様ぇ御歩行相済相勤同所ニて病死仕候

○一、父古家市右衛門生国因州鳥取ニて浪人仕罷在、其後作州津山ぇ参浪人ニて罷在候

○一、私儀生国作州津山森美作守殿ニて次物書役相勤、切米拾四石四人扶持被レ下相勤居申候処、美作守殿近習頭伊藤八太夫と申者ぇ家臣申請ニ成候て、知行百三拾石ニて家臣相勤、八太夫方へ美作守殿被レ為レ成候節、御目見仕金子頂戴仕候、知行折紙所持仕候私次相続可レ被ニ仰付一候処、世悴喜兵衛幼少ニ付養子仕、右之扶持切米無ニ相違一被レ下相勤居申候得共、作州御取上被レ成候ニ付、家中一統浪人仕候、私叔美作守殿ニてハ松崎甚右衛門と申候、其後江戸へ参、松平越後守殿へ被ニ召抱一小役人と申品ニて金七両三人扶持被レ下相勤居申候、年頭独礼申上御流頂戴仕候、然処寄親小須賀帯刀と申家老不行跡ニ付身上御潰ニ成、其後帯刀寄子出入之者大勢御暇被レ下私儀無ニ御構一御暇被レ下岡山ぇ罷越候、越後守殿ニてハ松崎惣次郎と申候

○一、宝永五年二月閑谷御役人之内ぇ被ニ召抱一、御切米拾四俵弐人扶持被レ下、学校御用相勤申様と市浦清七郎申渡候

一、同年三月学校御馬御持被レ成、私へ御預ニ成、飼料請払共相勤申候

一、同六年十二月閑谷御銀請払并学校閑谷和意谷拝借取立之儀被ニ仰付一相勤申候

○一、同七年御奉公能相勤申儀達ニ御耳一候由ニて御切米壱俵壱人扶持御加増頂戴仕、学校御歩行格被ニ仰付一候旨、市浦清七郎申渡中間一等学校御番相勤申候

一、同年九月閑谷和意谷御用向状通、右よりの役人安井李兵衛相勤来候得共、向後両人ニて相勤候様市浦清七郎申渡候

一、同年十二月御郡会所より御戻ニ成候御銀寄帳壱冊御預ヶ被レ成、其外閑谷御馬道具少々御鉄砲預居申候

○一、正徳元年七月居相孫八郎病気ニ付本復之内、当分学校諸法式見届相勤、通ひ子共行儀等可ニ申聞一之旨市浦清七郎申渡候

一、同年十月居相孫八郎相果申ニ付学校諸法式見届当分相勤候得共、其儘相勤申様と市浦清七郎申渡候

○一、同年十一月御加増五俵被レ下学校見届被二仰付一
諸支勤方宜事達二御耳一候由難レ有可レ奉レ存旨、市
浦清七郎申渡候
一、同年十二月居相孫八郎預居申候誓詞之事并学校
閑谷和意谷三ヶ所之宗門御改之事請込相勤申候
一、同二年二月閑谷和意谷下札改致、精書之支相勤
申候
一、同年六月学校閑谷和意谷三ヶ所諸役人御勘定聞
候事、安井杢兵衛と両人相勤申候
○一、同三年十二月御奉公能相勤申由二て為二御褒美一
御米弐俵頂戴仕候
○一、享保元年十二月右之通二て御米弐俵頂戴仕候
○一、同二年六月御入国之節仲間一統、御通掛之御目
見仕候
○一、同三年十二月御銀方骨折申二付御米三俵被レ下、
御銀方相勤候内可レ被レ下旨、岡助右衛門笹岡次郎
七郎広沢喜之介申渡候
一、同六年四月より七月迄之内、夏嶋喜左衛門儀二
付三度和意谷へ参候
○一、同七年三月御加増三俵頂戴仕、近年御奉公骨折
申段達二御耳一之由、岡助右衛門笹岡次郎七郎広沢
喜之助申渡候、御切米都合弐拾三俵三人扶持従二閑
谷一被レ下候
○一、学校御知行所山林之事并御百姓願書留并閑谷和
意谷御百姓願書留之事并閑谷和意谷留帳之事相勤
申候
一、学校閑谷和意谷諸役人御切米之切手調渡候事相
勤申候
○一、殿様御参府御帰国并東照宮御祭礼之節役儀等度
々相勤申候
一、閑谷御読初秋葉和意谷御墓参見届御用度々相勤
申候
一、火事之節は学校火廻相勤申候
一、同九年三月閑谷御銀方拝借方共御用御免被レ成
候旨被二仰渡一候
一、同十二年十一月御印帳付被二仰付一候
一、同十三年八月御黒印頂戴仕候
一、私当年六十九才罷成候　　已上
享保十四己酉年十二月廿八日　　古家喜右衛門
笹岡次郎七郎殿
（朱書）
喜兵衛様奉公書二ハ右朱丸之分計御書出シ被レ成候
文言等少宛之違ひ有レ之、私御奉公書ハ同名喜兵衛

書上申通と相調候故、朱丸之分計用ひ申当り也

自分御奉公之品覚書

一、享保十七壬子年正月廿四日新田方御雇被二仰付一、同日近藤十右衛門より手紙ニて申参上下着、同日御用所へ参候処、十右衛門同役ニて、石丸平七郎（当時御勘定）頭之宅にて被二申渡一被レ下物銀壱枚半壱人扶持認料壱ヶ月五匁宛

御礼林武太夫（御作廻方）両判形両郡代石丸平七郎御組頭え十右衛門同道

一、同廿五日於二御用所一誓詞相調近藤十右衛門見届

（朱）朱丸之分六口ハ御内々ニて被レ下候銀故御奉公書ニハ出ッ不レ申候

○一、同十八癸丑年十二月御奉公精出相勤由ニて、香川亦左衛門殿（御組頭）御申達新田方刺合米代之内ニて銀札弐拾五匁被レ下候、尤御内々也

○一、同十九甲寅年十二月右同断銀札弐拾目被レ下候

○一、同廿乙卯年十二月右同断銀札弐拾目被レ下候、笹岡次郎七郎殿舟戸久左衛門殿より（御作廻方）相移十右衛門申渡

一、同二十一丙辰年二月廿八日於二御評定所一笹岡次郎七郎殿舟戸久左衛門殿御列座ニて只今迄被レ遣銀之処、此度被レ遣米拾五俵御直ッ被レ下旨被二申渡一候

○一、元文二丁巳年十二月御用多時分骨折候ニ付刺合米代之内銀札三拾目被レ下候、舟戸久左衛門殿御聞届之旨、十右衛門被二申渡一候

○一、同三戊午年十二月右同断銀札三拾目被レ下候

○一、同五庚申年十二月右同断銀札三拾目被レ下候、下方覚兵衛殿舟戸久左衛門殿（御作廻方郡代）御聞届十右衛門被二申渡一候

一、寛保元辛酉年五月廿三日御用之儀有レ之旨、林仁兵衛より手紙参候、尤御礼日ニて御城え参於二菊間一舟戸久左衛門殿（御作廻方）神屋久次郎殿（御勘定頭）列座ニて此度御切米三拾俵三人御扶持被レ下、次勘定之者ニ被二召出一、其儘新田方御用相勤候様ニ久次郎殿被二申渡一候（御家中一統御帰国之御礼候故上下用意参候へ共内計ニて御申渡御礼ニハ上下ニて参）

御礼御小仕置候不レ残久次郎殿へハ林仁兵衛同道近藤七郎右衛門殿（小性頭）大御目付御判形御郡代御組頭御礼ニ参

一、同廿九日於二御評定所一誓詞指上候、御歩行目付山口善五郎見届

一、同二壬戌年三月八日於二御評所一（ママ）御黒印頂戴神屋久次郎（御勘定頭）被二相渡一

御礼御当番御小仕置上坂多仲殿并神屋久次郎へ参

一、寛保二壬戌年十月関東御普請之御手伝被レ蒙レ仰候二付、仲間一統寸志として五歩通指上度旨勘定頭那須半兵衛ぇ書付を以申上候処、御大慶思召候段御意之趣於二御勘定所一半兵衛ぇ被二申渡一（一統上下御請頭へ参、但御家中一統之御意申候）

一、同三癸亥年六月十一日右御普請相済御祝義仲間寸志指上候者へ御吸物御酒被レ下御城鑓之間二て頂戴

御礼二頭那須半兵衛へ参

後

一、延享元甲子年三月廿三日当秋江戸御供被二仰付一候旨那須半兵衛宅二て被二申渡一

御請御当番御小仕置（服部図書殿）御道中判形（森半左衛門）勘定頭（那須半兵衛）三所へ参（御用所取頭林仁兵衛へ案内旁被レ下候間勤来）

前

一、寛保三癸亥十二月廿六日於二御用所一西浦惣左衛門被二申渡一候ハ去年已来外御用之義骨折相勤候段、御作廻方御聞届被レ成候、右御褒美金子弐百疋被レ下候旨、尤新田方刺合米代之内二て被レ下候由御礼御作廻方（服部図書殿水野主計殿）御作廻方組頭（西浦惣左衛門）勘定頭（那須半兵衛）右四ヶ所参（高須省介六つ時被二相勤一候自分二林佐平殿善介へ参

一、延享元甲子年七月朔日岡山御発駕御供仕、木曽路通同十八日江戸着

一、同年九月廿七日御飛脚到来左之通那須半兵衛より申来

一筆致二啓上一候、御自分儀来年御留守江戸直詰被二仰付一候間、可レ被レ得二其意一候、此段為二耳入一如レ斯候、恐惶謹言

九月十九日　　那須半兵衛（書判）

古家喜平治殿

右之通被二仰付一於二江戸一御請取之通

御小仕置（池田要人）御判形（森半左衛門）へ参平服半兵衛へ返答二て御請申上ル（林仁兵衛へ以二書面一右之挨拶申入）

一、延享元甲子年十月晦日之夜、渡夫上道郡国富村長次郎町ぇ出候て帰可レ申と考違ひ願御門札上り候、後二成断立不レ申自分より書付指出候、奥二記

一、同二年乙丑二月十日之夜、渡夫邑久郡西幸崎村

源太郎致二欠落一候、依レ之書付出は奥ニ有レ之

一、同二乙丑年四月十四日去々亥已来御用多時分骨折相勤候ニ付金子百疋被レ下候旨、森半左衛門殿被二仰渡一候由、西村李兵衛より相移御指紙ニて相渡ル

御礼森半左衛門殿へ参、那須半兵衛殿へ武並紋介両名ニて御礼状出候

一、延享二年十月六日公方様御代替ニ付献上物有レ之、御歩行仲間不足ニ付御雇ニて御本丸御献上ニ付参

一、同年十一月十二日一条左兵衛様江戸御下向ニて御屋敷へ御入被レ遊候節、御徒不足ニ付御雇ニて表御門へ堅メ罷出相勤

一、同年八月公儀御尋之日本記録日記類之書籍御触有レ之、無レ之段村上藤左衛門へ書付出ス

一、延享三年丙寅正月江戸より御国へ願候て仲間伊吉銀三百目借用申候

一、同年四月十四日江戸御用仕廻候ニ付罷立、五月朔日御国ヘ着

一、同年六月十六日御立合ニ妻引請之願差出、同十四日願之通被二仰付一

御礼御月番御小仕置池田要人殿那須半兵衛殿へ上下ニて参、同林仁兵衛へ挨拶旁参

一、延享四丁卯年四月廿八日中之町京屋小右衛門裏かし座敷を借り引越ニ付口上書頭へ出ス奥ニ記

一、同年五月廿八日下之御屋敷前遠藤久賀跡家被レ下候旨、那須半兵衛殿於二御宅一（御不快ニて引込故）被二申渡一

御礼御小仕置四人両御判形、半兵衛殿へ平服ニて参

一、同年十一月廿八日来年来聘之朝鮮人御用被二仰付一候旨、於二御勘定所一那須半兵衛殿被二申渡一

御請池田木久殿（御用請込）那須半兵衛殿佐分利勘五郎（御用請込也）頭廻シ荒木亦次郎同役三浦平之介被二仰付一

一、延享五戊辰年二月四日船頭町ニて御船手構ひ之家被レ下候旨、池田木久殿より那須半兵衛へ以二手紙一申参候由、石原彦介ヘも家被レ下候段一紙有レ之、右手紙仁兵衛より添状ニて参

御礼御小仕置不レ残両判形那須平兵衛へ平服ニて参

別廉久賀跡家拝領被二仰付置一候所不二相渡一、其家ニ御出入之義有レ之由ニて御船手相渡其替り家を被

レ下候□之由、然共木久殿より之手紙ニも何之故もなく只家被レ下候と計有レ之候、林仁兵衛迄相尋候へ共何之移りも無レ之、只家屋敷被レ下候御礼計ニ参候様との事ニ付元通相勤

後

一、被レ下候家湯殿雪隠無レ之ニ付願指出、願奥ニ有レ之、願之通被ニ仰付一候ニ付半兵衛殿被レ申候旨、林仁兵衛より辰二月十五日手紙ニて申参

御礼図書殿御月番半兵衛殿平服ニて相勤

前

一、辰二月廿日右家屋敷請取、同十五日引移ル

一、朝鮮人御用辰三月廿六日牛窓へ出張、四月十五日罷帰

一、同帰帆御用辰六月廿八日牛窓へ出張、七月十一日罷帰

一、寛延元延享五辰八月朔日より改元

一、同元年閏十月御留守沢原孫太郎石丸平兵衛より那須半兵衛ヘ手紙ニて別紙書付之儀候御奉公書之年限当方ハ未ニ相廻一候間、当月中ニ御差出可レ被レ成由申来

別紙ニ先祖之儀ハ同姓喜平次より書付有レ之其身最初より寛保元年迄之分無レ之

古屋喜平次

右之通ニ候故、寛保元酉年七月晦日神屋久次郎ヘ差出候御奉公書之通写指出、閏十月十九日名当ハ那須半兵衛也

一、寛延二己巳年八月廿四日寿姫様当冬御上京之御供被ニ仰付一候間、生駒弥五右衛門於ニ御城一被ニ申渡一候林仁兵衛同道ニて参

御請御小仕置御在国之分両人生駒弥五右衛門佐分利甚五郎ヘ参候平服但生駒佐分利判形役より勘定頭兼役也

一、同年十一月十六日去年朝鮮人御用相勤候面々ヘ御祝義於ニ御評定所一御吸物饗御肴雁いり□□御酒被レ下

麻上下御礼佐分利甚五郎ヘ罷越朝鮮人御用判形生駒弥五右衛門ヘ参両人共判形当時支配頭

一、同年十一月十八日姫君様御供ニて発足、同廿六日京着十二月三日京罷立、同八日岡山へ罷帰

一、右御供ニ罷越候砌御京着御当日於ニ御殿一御支度被レ下、御道中寒気之時分相勤候ニ付一統金子百疋拝領、尤姫君様より御心付御内々ニて被レ下候由、生駒弥五右衛門被ニ申渡一御国御用人中へ不レ及ニ申達一候由

宝暦と改元

一、寛延四辛未年二月十五日御加増米拾俵御加扶持壱人被レ下、御勘定方御中小姓御取立被レ成候旨、於二西御丸一池田勘解由殿被二仰渡一

同日三浦平之介在津市左衛門同事ニ被二仰付一、

御同柄故上下ニて罷出候

御礼御三老ぇ佐分利甚五郎同道時判形頭兼役小仕置中

両判形へ参候判形より勘定頭兼役也大目付中へも参

一、同年同月廿三日於二御評定所一誓詞付候、三人一所大御目付神屋久次郎見届

一、同年五月十一日平左衛門と変名仕度旨願書指出候所、同十四日願之通変名被二仰付一候、尤改御礼申候節より相改候様ニ木久殿より申来候由、生駒弥五右衛門より手紙ニて申参

御請池田木久小仕置生駒弥五右衛門佐分利甚五郎へ参平服

一、同年五月十五日御中小性御取立之御礼申上ル但独

礼ハ無之改御礼之分一統御請ニ出候

御礼和泉殿御老中不レ残生駒弥五右衛門同道御小仕置両判形自分勘

一、宝暦二壬申歳三月十三日於二御評定所一御加増御加扶持之御黒印頂戴

御礼御月番御小仕置両頭衆へ参、上下

一、同年十二月六日御隠居家督被二仰付一候旨申参為ニ御歓一一気御三老へ参頭へも参

御歓慰斗目頭之宅之被二申渡一

㊀此所へ可レ入

一、同三癸酉年十一月御家督御祝義御料理被レ下候旨被二仰渡一、右之為二御請一御三老へ罷出十三日十四日十五日三日之内可ニ相勤一旨

一、同年同月廿一日於二御城一御料理頂戴御目見申上候

当日尉斗目着於二御書院一御料理被レ下

御献立

御差味　鯉子付くらけ　わさひ　御汁　椎茸　大根　ちさ　かうの物　なら漬　花丸

御煮物　こち　長芋　木くらけ　すまし　御汁　鳥　牛房　せり　ゆ　白詰　大せい　かけ汁

御肴　うを　せうか　大こん　いか　すまし　御吸物　包玉子　のり　ゆ

御酒五献　御茶菓子　水草

御茶　惣御菓子　大まんちう二　大落雁　菊輪　二

御薄茶

右相済御三老へ御礼頭へも参

一、宝暦四甲戌年二月廿五日御家督ニ付御書替御黒印於ニ御評定所一頂戴

御礼御用番之御老中御小仕置月番并三頭え参此時判形三人兼帯

一、同年三月七日七軒町之裏之町林亦四郎跡家御替被レ下候旨、水野主計より相移薄田兵右衛門判形より勘定頭兼帯荒木亦次郎へ被ニ申渡一候旨同人より相移荒木ハ勘定方取扱役也

御礼御月番御老中御小仕置三頭へ参、袴羽織也

△

一、同年十月朔日於ニ西御丸一来寅年江戸詰被ニ仰付一候旨、小畠儀左衛門判形より勘定頭兼帯被ニ申渡一

御礼御三老御小仕置不レ残三頭へ参、袴羽織

㊀之所〈可レ入

一、宝暦三癸酉年七月七日御代替ニ付御引免之内弐歩通、只今御戻被レ下候旨被ニ仰出一

御請御礼上下着頭へ参

△之所〈可レ入

一、同四甲戌年三月十日七軒町屋敷へ引越、前之屋敷中山仁右衛門へ被レ下候ニ付、同十四日同人立合ニ て相渡

一、同五乙亥年四月九日江戸着三月廿一日発足

一、同年四月十三日御通り掛御目見申上候

隼人殿御披露御取合也、御礼沢原孫太郎殿へ参江戸判形也

一、同年八月九日中務様御用向之儀世話仕候段、中書様被レ成ニ御聞一、御太慶思召候旨ニ て集肴一篭被ニ下置一候旨、三村市右衛門より手紙ニ申来

御礼山中源左衛門三村市右衛門へ参、上下也

一、同年極月右同事ニ て鮭塩引壱つ頂戴

一、同六年江戸罷立候、二月右同事ニ て官袴地一反拝領

一、同六丙子四月五日殿様御着座已後江戸方仕廻罷立候ニ付、御目見被ニ仰付一池田要人殿□屋御留守御用相勤候者共と御披露有レ之骨折候と御意有レ之

一、同年同月八日江戸罷立伊勢参宮、同十七日大坂より舟ニ て廿二日乗船、同廿六日帰着

一、伊勢参宮之願書ハ江戸へ御着座已後指出候

一、宝暦九己卯年閏七月廿八日於ニ御勘定所一西浦惣左衛門勘定頭被ニ申渡一営々御用方出精之上、当夏御作廻方御用之義残暑甚敷時分骨折候ニ付、御用所

銀之内ニて金子三百疋被レ下候

御礼西浦殿計へ参

一、同年八月九日当春御供立江戸御立寄御貸金取立之義、野田権八郎両人ヶ(ンテ)取立候様ニ西浦惣左衛門殿被ニ申渡一

御請丹羽登殿(御小仕置御作廻方)野田殿同道ニて何之無ニ差寄一帳へ名計留置、西浦殿へ参

一、同年九月八日悴源次郎義御勘定所浮米之内ニて三人御扶持被レ下、見習被ニ仰付一候旨、池田隼人殿被ニ仰渡一候由、西浦惣左衛門殿被ニ仰渡一

御礼隼人殿ヘ小仕置判形西浦殿へ自分参、源次郎は三浦瀬兵衛(御用所頭取)同道ニて御小仕置判形頭殿へ参

一、同年十二月三日来年江戸御供被ニ仰付一

御請御老中御中老御小仕置頭ヘ参

一、宝暦十庚辰年三月十八日御供ニて岡山発足、四月七日江戸着

一、同七月御転任御兼任御饗応ニ付、惣膳奉行被ニ仰付一

一、同十月十三日将軍宣下御饗応、右同役被ニ仰付一

一、同日右御用ニ付御目見被ニ仰付一

一、右御饗応相済、同十一月廿四日一統御目見被ニ仰付一骨折候段御意被ニ成下一

一、同月廿八日右御用骨折候ニ付為ニ御祝義一金一両被ニ下置一候旨、池田志津摩殿被ニ仰渡一

同病ニて沢原孫太郎御目録被ニ相渡一(御礼御中老頭廻候金子八十二月十日相渡)

一、同年十二月廿八日当年は御用向格別骨折候ニ付金弐百疋被レ下候旨、沢原孫太郎被ニ申渡一

御礼孫太郎殿計御内々故也

一、同十一辛巳年四月廿一日御供ニて江戸発足、五月九日帰着

一、同十二壬午年御隠居様六十一之御祝ニ付、御家中不レ残御祈禱申上候

自分年数御吟味ニ付差合御祈禱不ニ申上一仲間一統於ニ圓務院一御祈禱仕

一、右為ニ御祝義一於ニ御城一御料理頂戴被ニ仰付一、二月廿六日仲間一統頂戴

但御祈禱不ニ申上一者も被レ下候、右御請御三老へ参御料理相済御礼同断

御献立

差味 鯉 海月 寒てん 乃年母 葵 汁 短冊豆腐 椎茸 ちさ

肴物 花丸 なら漬

煮物 魚切身 長芋 木くらけ 汁 すまし 雁 大こん 牛房

焼物小鯛

肴 魚 いか 大こん せうか 川たけ くわひ 吸物 いりこ とさかのり

御茶菓子 菊輪 まんちう 菓子 まつ風

酒三献

一、同年七月四日去卯年御帰国御供立之内へ御手元金拝借被ニ仰付一、右庄兵衛悴同権八郎自分と相役ニて取立被ニ仰付一候由、丹羽登小仕置御作廻方殿より相移、卯辰巳三年ニ取立済候ニ付、骨折為ニ色付一小判一両宛被レ下候旨、登殿被レ仰候由、三浦瀬兵衛より相移但、右取立金之内御内々ニて被レ下候

御祝御内々故、登殿頭へ参

一、同年九月十六日御隠居様当春御年賀ニ付、右御祝義御家中一統御目録金弐百疋被レ下候旨御用老被ニ仰渡一候由、西浦惣左衛門勘定頭被ニ申渡一

御礼御請御三老并惣左衛門え熨斗目上下ニて参

一統西丸付御小仕置へ参候間可レ勤旨移ニて相勤但御目録頂戴之儘

一、同年五月廿四日右為ニ御礼一御隠居様へ於ニ西御丸一御礼申上候処、御意被ニ成下一候

一、同年十月十五日悴源次郎義被レ遣米拾五俵壱人御扶持被レ下、御勘定所御雇被ニ仰付一

御礼御小仕置中并御勘定頭へ平服ニて参

一、同年悴源次郎御勘定所見習相励候内、御隠居様御祝年御祝義御雇亦々於ニ御勘定所一御料理被レ下、御目録銀弐両頂戴仕候、被ニ仰渡一九月十六日

一、宝暦十三癸未年四月朔日朝鮮人来聘帰帆共御用被ニ仰付一候旨、豊後殿於ニ御宅一一統被ニ仰渡一、

御請豊後殿丹羽登殿小仕置西浦惣左衛門殿御勘定頭

一、同年七月廿七日三浦瀬兵衛義御免ニ付、当分頭取役真津市左衛門と両人請持相励候様西浦惣左衛門殿宅ニて被ニ申渡一

一、同年十月十七日兼て朝鮮人御用被ニ仰付置一候へ共、御用紛敷候ニ付御免被レ成候旨、豊後殿申渡候由、中村重了殿より惣左衛門手紙ニて申来候旨、惣左衛門殿被ニ申聞一

一、同年十一月十六日社倉方御用被二仰付一候旨、於二御城一豊後殿被二仰渡一候由、惣左衛門殿相移、但不快居申候ニ付惣左衛門殿より手紙ニて申来

御請服部頼母殿小仕置御作廻方判形中御勘定

一、同月十九日御作廻方御用も可二相勤一候旨、服部頼母殿被レ仰由、惣左衛門殿より相移

一、此間へ可レ入　〇之印

一、同年十二月十六日源次郎義並之御賄扶持ニて次勘定被二召出一候旨、於二御勘定所一西浦惣左衛門殿被二申渡一

御請御月番小仕置不レ残判形御勘定頭

自分右為二御礼一隼人殿御月番小仕置惣左衛門殿へ参

一、同廿九日於二御評定所一源次郎誓詞御徒目付見届

一、同年来春御参府御供立帰被二仰付一候旨、於二御勘定所一西浦惣左衛門殿御申渡

御請隼人殿御月番小仕置惣左衛門殿

一、明和元甲申寿国院様御卒去ニ付、江戸立帰御供一統御免被レ成候

一、明和二乙酉五月十五日於二西御丸一新田方御勘定所□定役被二仰付一候旨、市正殿被二仰渡一候

御礼市正殿月番之御小仕置頭迄

一、同月十六日表方御用相兼勤候様、御勘定頭被二申渡一

一、同三丙戌年九月廿七日作略方御用請込可二相勤一候旨、小泉清右衛門殿宅ニて被二申渡一

奥ニ委記

一、同年十一月十五日江戸御堀浚御手伝御用被レ為レ済御満足思召候、右ニ付骨折候間御意被二成下一候旨、小川弥七郎殿被二申渡一

一、同四丁亥年正月廿八日御加増十俵被レ下候旨於二御評定所一主殿殿被二仰渡一

一、同年六月十六日御加増頂戴之御礼平服を以申上候

一、同年十月八日於二御城一御家督御祝義御料理頂戴御目見申上候

熨斗目着用

御祝御用番御老中頭宅

御献立

差味　鯉子付水母　山葵　煮酒　□　汁　蕪　椎茸

かうの物　なら漬　粕漬茄子

煮物　ミそ　うを　長いも　木くらけ　□　小鯛　汁　塩煮　鯛□切　こんふ

清口　御肴　魚　大こん　いかせうか　御吸物　いりこ　のり

盆　御蜜菓子　水くり　川たけ　御茶

大皿　縁之御菓子　大まんちう　まつかせ　菊輪　九　三

一、明和五戊子年正月十九日御意被レ成候は去年御疱瘡御快被レ遊、御満悦思召候、仍レ之為二御祝儀一御目録弐百疋頂戴被二仰付一候旨、豊後殿被二仰渡一候由、同廿一日於二御勘定所一小川弥七郎殿御申渡シ

一、同年三月十一日於二御評定所一御家督御書替之御黒印并去年御加増之御黒印共頂戴仕候

一、明和三丙戌年八月三日近藤十右衛門請込候荷物為替之取立御用可二相勤一旨、小川弥七郎殿被二申渡一

一、同年九月廿七日作略方御用社倉方へ一所請込可レ申旨、御用老被二仰渡一候由、宮城倉八殿より相移候由、小泉清右衛門殿被二申渡一

一、同五戊子年九月十三日御作廻方御内用之儀有レ之、林亦市両人大坂へ被レ遣候、用意次第可レ致二出立一候、様子次第京都へ被レ遣候儀も可レ有レ之候、此段申聞候様御用老被レ仰候付、小川弥七郎殿御申渡

一、同年九月十六日右御用二付岡山出立、十月十六日帰着仕候

一、同六己丑年三月廿二日願上居宅南之方□二桁行壱間半之雑物置立候事

一、同年十月廿五日鴻池善右衛門御国へ参候旨、御継人足両度其外所々振廻等出会仕候

一、同年三月鴻池善八郎筑前へ罷帰候序二岡山止宿吉千右衛門折節御国へ参居申候鴻池善右衛門より頼候て御後園拝見御願二付御内々二て御見せ被レ成候、千右衛門不快二付私同道仕候

一、同年十二月朔日御意被レ成候は御作廻方御用出精骨折候二付、御上下頂戴被二仰付一候旨、池田主殿殿被二仰渡一候

御礼豊後殿　御月番　主殿殿舎人殿御作廻月番判形、

但御用老初御役人不レ残相廻候

一、同年十二月十五日右ニ付御通掛御礼申上候

御通掛御礼不レ及

一、明和七庚寅年六月五日於二御勘定所一御作廻方御用之儀有レ之、大坂え被レ遣候旨、大和殿被二仰渡一候由、森半左衛門佐々重郎左衛門殿御申渡

一、同年同月七日於二西御丸一左之通大和殿被二仰渡一平左衛門義信濃守様へ御作廻御指支ニ付、右御用被二仰付一候磯口源二郎岡崎吉介申談候様ニ可レ致候、委細之儀ハ小川弥七郎聞合可レ申候

小川弥七郎判形壱人出座

右御請大和殿要人殿弥七郎殿両判形へ廻勤

一、大坂御用六月十日岡山龍立、十三日昼着、十六日昼前大坂立、十九日昼過帰着

一、明和八辛卯年三月十六日御隠居様七十御賀首尾能被レ為レ済ニ付、御目録金弐百疋被二下置一候旨於二御勘定所一小崎半兵衛殿被二申渡一

御礼御三老判形中 殿斗目上下

一、同廿一日右ニ付於二西御丸一御礼御請被レ遊候 殿斗目上下

一、安永二癸巳年十一月十五日於二御城一市正殿被二仰渡一

御意被レ成ハ古家平左衛門義御作廻方御用骨折相勤候付御加増拾俵被レ下

右御礼市正殿え勘助殿同道其外ハ小仕置両頭廻勤

一、同十二月朔日右御礼平服を以申上候

右御礼御月番御用老頭同道、其外自分廻勤

一、同三甲午年四月廿一日御加米之御黒印於二御評定所一頂戴仕候

一、同年十一月廿一日娘北田与右衛門母養女仕候旨願指出候所勝手次第可レ仕旨、同廿四日森半左衛門殿より真津市左衛門へ手紙ニて申来

御礼御用老御月番小仕置同断判形へ廻勤

一、同四乙未年八月九日於二御評定所一長右衛門殿被二仰渡一

丹波守様御作廻御指支ニ付、右御用被二仰付一御請長右衛門殿御月番大和殿御作廻方要人殿へ平服ニて参、御屋敷へハ上下ニて御請ニ参

一、同年九月十二日御隠居様御不例ニ付、京都より畑弥兵衛殿御出ニ付、右御用被二仰付一候旨、大和殿被二仰渡一

右御請大和殿判形中

一、同年十月廿二日於二御城一京都より畑弥兵衛殿御出候節骨折申候旨御意被レ成候旨、市正殿被二仰渡一

右御礼大和殿市正殿要人殿判形中

一、同年閏十二月十九日此度畑弥兵衛殿御出二付、右御用被二仰付一候旨、市正殿被二仰渡一候由、森半左衛門殿□勘助殿被二申渡一

右御請市正殿判形中

一、同五丙申年十月五日於二御評定所一市正殿被二仰渡一

御意被レ成ハ平左衛門義数年出精相勤御作廻方御用格別骨折候付、新知百三拾石被レ下御勘定所頭取被二仰付一

一、同六丁酉年正月廿二日清作義拾俵壱人御扶持御増御中小性御取立被レ成候旨、於二御評定所一市正殿被二仰渡一

右御礼市正殿ゑ半兵衛殿同道、大和殿小仕置判形中廻勤

一、同年六月朔日新知被レ下候儀御礼鳥目を以申上御礼月番御老中小仕置判形中同道無レ之

一、同年同月同日清作改御礼鳥目を以申上

右同断

一、同年同月三日去年新知被レ下頭取役被二仰付一候品書上候様、相移小崎半兵衛殿へ指出□存候

私義安永五丙申年十月二日新知百三拾石被レ下、御勘定方頭取役被二仰付一、当六月朔日改御礼申上候

六月三日　古家平左衛門

右之通指出候所、頭衆之書取り相成、半兵衛殿より御指出

一、同年九月十八日於二御前一右之折紙頂戴、大和殿御渡

御礼御用老小仕置判形へ廻勤

一、同年九月十九日左之通願差出

口上

私御知行米居宅米置所無二御座一付、御知行米大豆とも御蔵納二仕、麦は手前納仕度奉レ存候、此段宜様奉レ願候、已上

九月十九日　古家平左衛門

森半左衛門殿

小崎半兵衛殿

一、同年十一月四日百姓割帳面、御郡奉行加藤伝兵

衛より書状相添来

□上座郡中野村御百姓割

高百三拾石

一、家内　男五人　女三人　外牛一疋　儀八

一、家内　男弐人　女弐人　外牛一疋　庄介

一、家内　男五人　女三人　外牛一疋　多次郎

一、家内　男壱人　女三人　外牛一疋　安兵衛

一、家内　男弐人　女壱人　助四郎

一、家内　男弐人　女三人　外牛弐疋　善六

右名主中野村名主金吉村平蔵書出、大庄屋浅竹村惣二郎并加藤伝兵衛奥書

一、同七戌年正月十一日娘高原甚八郎養女□願指出、右願之通勝手次第可レ仕旨申来

御礼御用老小仕置月番判形

一、同年三月十一日清作御供御出立

一、同年同月十六日清作御加増之御黒印代判守屋清

左衛門頂戴

一、同八己亥年四月廿八日御倹約ニ付勘定上聞、此已後勘定方頭取上聞兼帯被ニ仰付一、仍レ之毎歳銀五枚宛被レ下候旨、市正殿被ニ仰渡一

御礼平服市正殿大和殿小仕置判形

一、同年八月九日御納米之儀御用達へ頼五人え被ニ仰付一候付、右見届被ニ仰付一候旨、小崎半兵衛殿被ニ申渡一

寛政　閏二月被ニ仰出一天和年中之通御軍用書出し左之通此度書付遣ス

半切

御軍用人積書上

一、壱人　具足持

一、壱人　鑓持

一、壱人　荷桶持

一、壱人　荷持

合四人

右之通召連罷出候積ニ御座候、已上

閏二月　古家清作

高乗忠右衛門様

（以下三丁白紙）

書上留

先祖幷御奉公之品書上

一、先祖之儀は同名喜兵衛書上申通御座候

一、私義享保十七壬子年正月廿四日新田方御勘定所御雇被仰付銀壱枚半被下旨、石丸平七郎申渡候

一、享保二十一丙辰年二月廿八日被遣米拾五俵御直被遣旨、於御評定所笹岡次郎七郎舟戸久左衛門申渡候

一、寛保元辛酉年五月廿三日御切米三拾俵三人御扶持被下、次勘定之者被召出之旨、於御城神屋久次郎申渡候

一、私行年二十五歳罷成申候

已上

寛保元辛酉年七月晦日　古家喜平次　書判　印判

神屋久次郎殿

一、宗門御改書上八月十五日書上　同月廿一日連判

切支丹宗門御改書上

一、自分　日蓮宗旦那寺塩見町本行寺にて御座候

召仕之男女無御座候、已上

古家喜平次

寛保元辛酉年八月十五日

神屋久次郎殿

一、寛保二壬戌八月宗門御改文言、右同断当日断十五日書　上廿一日連判

一、同三癸亥年八月宗門御改書上右同断

一、延享元甲子年八月御国にて宗門御改右同断、代判小坂代介より出

一、同於江戸書遣候

切支丹宗門御改書上

一、自分　日蓮宗旦那寺備前岡山本行寺

右之通御座候、留守家内ハ無御座候、以上

古家喜平次　書判　印判

延享元年八月

右之通相違無御座候、已上

西村杢兵衛　書判　印判

森半左衛門殿

一、延享元年十月卅日於江戸渡夫国富村長四郎御門を出帰不申節書上

口上

私請取居申候渡夫御小人上道郡国富村長四郎昨夜九ツ時頃不図罷出、今朝ニ至帰不レ申欠落仕候、尤於二手前一出入ヶ間敷義少も無二御座一候、右ニ付御門通リ札上リ居申候。右御門通札ハ西村李兵衛へ渡申通札と私へ渡申通札と一所懸置候所、取違候て右李兵衛へ渡申通札を持罷出候、何共麁抹成義仕迷惑奉レ存候、右之札相渡候様奉レ願候、此段宜様被二仰達一可レ被レ下候、已上

子十一月朔日　古家喜平次 書判

森半左衛門殿　当時之御判形

右堅紙相調指出候処、同三日左之通付紙〆半左衛門殿より帰、内記殿へ申通候処御聞届候、御門通札勝手次第請取セ候様ニと御申、尤八田庄兵衛へも申通置候事

十一月三日

右ニ付八田庄兵衛へ出書付左之通候

古家喜平次家来一昨朔日之暁御屋敷罷出帰不レ申候ニ付、御門通札揚リ居申候、然所右札西村李兵衛者へ相渡候札御座候を喜平次家来取違罷出候、右之趣御聞届相済札相渡候様との御事ニ候間御渡可レ被レ下候、已上

子十一月二日　古家喜平次 書判　西村李兵衛 書判

八田庄兵衛殿　大御目付

右半切ニ相調出札相渡

一、延享二乙丑年二月十一日渡夫源太郎欠落ニ付出ス書付

口上

私渡夫邑久郡西幸崎村源太郎義、昨夜自分用事之儀有レ之由断申向御屋敷へ罷越候処罷帰不レ申欠落仕候、尤御用所之義共出入ヶ間敷義少も無二御座一候、右ニ付御門通札上リ居申候間、相渡候様奉レ願候、此段宜様被二仰達一可レ被レ下候、已上

丑二月十一日　古家喜平次 書判

森半左衛門殿

付紙ニて御下知有レ之

内記殿へ申達候処、御門通リ札勝手次第請取

セ候様ニとの御事、尤大御目付へも申通置候事

二月十三日

右之通埒明候旨二月十三日之夜申来、御門通札請取候書付

口上

私渡夫去ル十日御屋敷罷出帰不レ申候ニ付、御門通札上リ居申候、右之段御聞届相済札相渡候様との御事御座候間御渡可レ被レ下候、已上

丑二月十四日　　右　書判

八田庄兵衛殿

御奉公之品書上

一、寛保元辛酉年七月晦日迄之儀は書上置申候

一、同二壬戌年三月八日於ニ御評定所一御黒印頂戴仕候

一、同三癸亥年六月十一日去年関東御普請御手伝首尾能差済候、為ニ御祝儀一仲間一統御吸物御酒於ニ御城一頂戴仕候

一、延享元甲子年三月廿三日当秋江戸御供被ニ仰付一候旨、那須半兵衛申渡候

一、同年七月朔日御供ニて岡山発足仕、同十八日江戸着仕候

一、同年九月来年御留守番直詰被ニ仰下一之旨、那須半兵衛より書状を以申付候

一、私行年三十三歳罷成申候

以上

右　書判

延享二乙丑年二月十五日

森半左衛門殿

右之書付江戸ニて出候

一、宗門御改延享二年八月廿八日書上文言、去年之通荒木文次郎奥書御国ニてハ西村平吉代判ニて書上済

一、延享二年八月江戸ニて出候書付

口上　立紙判形無レ之

此度公儀御尋之日本之記録日記類之書籍所持不レ仕候、已上

八月廿日　　小坂代介
古家喜平次

村上藤左衛門殿

一、同三年六月出ス願書

口上　立紙書判計上包有

高原又兵衛娘私妻ニ仕度奉レ存候、此段不レ苦思召候ハヽ可レ然之様被ニ仰達ニ可レ被レ下奉レ願候、已上

古家喜平次　書判

六月十二日

那須半兵衛殿

一、同三年八月宗門御改書上

切支丹宗門改書上

一、自分　日蓮宗旦那寺本行寺

一、妻　右同断　付紙ニて当六月御願申上引請候ニ付、此度初て書載申候

召仕之男女無ニ御座一候、以上

古家喜平次　書判　印判

延享三丙寅年八月十五日

那須半兵衛殿

一、延享四年四月借宅之願口上書

口上

私義兼々同姓喜兵衛一所居申候所、狭所難義仕候故別宅仕度可レ存候、此節相応之借宅も無ニ御座一候間、先当分中之町糸屋小右衛門座敷借り

是へ引移申度奉レ存候、此段可レ然様奉レ願候、已上

古家喜平次　書判

四月廿七日

那須半兵衛殿

一、延享五戊辰年二月十一日願出

奉ニ願上一

一、此度拝領仕候屋敷内湯殿雪隠無ニ御座一候、依レ之長九尺巾五尺ニ仕屋根ハ并ヘ瓦之湯遣所雪隠共一所ニ仕度奉レ存候、此段不レ苦思召候ハヽ宜様被ニ仰達ニ可レ被レ下候奉レ願候、已上

古家喜平次　書判

辰二月十二日

那須半兵衛殿

一、寛延二乙巳年十二月晦日迄之御奉公書上左之通

御奉公之品延享元甲子年十二月迄之儀は書上置申候

一、延享二乙丑年四月十四日於ニ江戸一去暮御任官之砌御用多時分骨折相勤候ニ付金子百疋被レ下候旨森半左衛門申渡候

一、同年十月六日公方様御代替ニ付御献上物有レ之、御歩行不足ニ付御屋ニて御本丸え御献上御用相勤候

一、同年十一月十二日一条左大臣様江戸御下向之節、御屋形え御入被レ遊候時分御徒不足ニ付、御屋ニて御門堅罷出相勤申候

一、同三丙寅年四月十八日江戸罷立、五月朔日帰着仕候

一、同四丁卯年十一月廿八日来年朝鮮人御用被ニ仰付一候旨、那須半兵衛申渡候

一、寛延元戊辰年二月四日船頭町ニて家屋敷被ニ下置一候旨、那須半兵衛申渡候

一、同年三月廿六日朝鮮人来聘御用ニ牛窓え出張仕、四月十九日御用仕廻罷帰申候

一、同年六月廿八日朝鮮人帰帆御用ニ牛窓え出張仕、七月十一日御用仕廻罷帰申候

一、同年十二月廿四日那須半兵衛御勘定頭御免被レ成、生駒弥五右衛門佐分利甚五郎支配被ニ仰付一候

一、寛延二己巳年八月廿四日冨貴姫君様御上京御供被ニ仰付一之旨、於ニ御城一生駒弥五右衛門申渡候

一、同年十一月十六日去年朝鮮人御用相勤候ニ付、為ニ御祝義一於ニ御評定所一御吸物御酒一統頂戴仕候

一、同年十一月十八日冨貴姫君様御供仕岡山罷立、同廿六日京着仕、於ニ同所一御用相勤十二月三日京都罷立、同八日帰着仕候

一、私義行年三十七歳罷成申候

已上

寛延二己巳年十二月晦日　　古家喜平次 書判 印判

生駒弥五右衛門殿

佐分利甚五郎殿

一、寛延四辛未五月十一日指出変名之願書立紙上包

口上

私義平左衛門と変名仕度奉レ存候、尤此度御勘定方御中小姓御取立被ニ仰付一難レ有仕合奉レ存候、右御礼御請被レ遊被レ下候は其節より右之名相改申度奉レ存候、此段宜様被ニ仰達一可レ被レ下候奉レ願候、已上

五月十八日　　古家喜平次 書判

生駒弥五右衛門殿

佐分利勘五郎殿

一、宝暦五乙亥年正月御奉公之品書上左之通

御奉公之品書上

一、寛延二乙巳年十二月晦日迄之義ハ書上置申候

一、同三庚午年六月廿七日侍従様御初入之御礼申上候

一、宝暦元辛未年二月十五日御加増拾俵壱人御加扶持被レ下、御勘定方御中小性御取立被レ成候旨、於二西御丸一池田勘解由殿被二仰渡一候

後

一、同年五月十五日右御取立之御礼鳥目を以申上候

前

一、同年五月十一日平左衛門ニ変名仕度旨御願申上候処、同十四日願之通変名被二仰付一候旨生駒弥五右衛門申渡候

一、同二壬申年三月十三日於二御評定所一御加増御加扶持之御黒印頂戴仕候

一、同三癸酉年六月三日御家督初て之御礼申上候

一、同年同月十三日御隠居様ぇ御礼申上候

一、同年十一月廿一日於二御城一御家督御祝義之御料理頂戴御目見申上候

一、同年(宝暦四カ)三月七日林亦四郎跡家御遣被レ下候旨、薄田兵右衛門申渡候

一、同年十月朔日於二西御丸一来亥年江戸詰被二仰付一候旨、小畠儀左衛門申渡候

一、私義行年四十二歳罷成申候

已上

古家平左衛門 書判 印判

宝暦四甲戌年十二月晦日

神屋久次郎殿

小畠儀左衛門殿

薄田兵右衛門殿

切支丹宗門御改書上

一、自分日蓮宗且那寺備前岡山本行寺

御当地ぇ召連候下人宗門常々相改疑敷者ニてハ無二御座一候、則且那坊主宗旨請手形手前取置申候、留守家内は於二御国一書上申候

古家平左衛門 書判 印判

宝暦五乙亥年八月廿三日

沢原孫太郎殿

右手人召連候時申候御小人之時ハ御当地ぇ召連候下人無二御座一候、留守家内ハ於二御国一書上申候、

右書出計ニて連判無レ之候

一、宝暦九己卯年迄之御奉公書上左之通候

御奉公之品書上

一、宝暦四甲戌年十二月晦日迄之義ハ書上置申候

一、同五乙亥年三月廿一日御国罷立四月九日江戸着仕候

一、同六丙子年四月八日江戸罷立同廿六日帰着仕候

一、同七丁丑年正月十五日原彦八郎御勘定頭被ニ仰付一同人組罷成申候

一、同八戊寅年四月原彦八郎死去ニ付判形中御勘定方兼帯ニ付、当分支配ニ仰付候

一、同年六月西浦惣左衛門御勘定頭被ニ仰付一、同人組罷成申候

一、同九己卯年十二月三日来年江戸御供被ニ仰付一候

一、私義行年四十七歳罷成申候

已上

古家平左衛門

宝暦九己卯年十二月卅日　書判　印判

西浦惣左衛門殿

一、宝暦十辰五月公儀より御尋主殺之者書上

口上

此度従ニ公儀一御尋之喜兵衛と申者人相書之趣存寄無ニ御座一候、并家来吟味仕候処、右躰之者及ニ見聞一存当之者無ニ御座一候、此已後心当之者有レ之候は早速申出候様ニ屹申付置候、已上

名

宝暦十辰年五月十六日　書判　印判

沢原孫太郎殿

一、宝暦十一巳正月十五日従ニ御国一参候郷村高辻帳算用改候様ニ池田志津摩殿被レ仰候由、沢原孫太郎より相移改候品書上左之通候

御領内郷村高辻帳算用相改候処、相違無ニ御座一候、已上

古家平左衛門　印判　書判

巳正月十五日

沢原孫太郎殿

左半切紙調哉

一、宝暦十庚辰年三月十八日御供ニて岡山罷立、四月七日江戸へ着仕候

一、同年御転任御兼任将軍宣下御祝義御饗応御座候付、後日共惣膳奉行被ニ仰付一候旨、池田志津摩殿被ニ仰渡一相勤申候

一、同年十一月四日右御饗応相済候付一統御目見被仰付一骨折候段御意被二成下一候

一、同年同月廿八日右御饗応御用骨折候付為二御祝義一金壱両被レ下候旨、池田志津摩殿被二仰渡一候

一、同十一辛巳年四月廿一日御供二て江戸罷立、五月九日帰着仕候

一、同十二壬午年二月廿六日御隠居様御祝年為二御祝義一於二御城一仲間一統御料理頂戴御目見被二仰付一候

一、同年九月十六日右御祝義付従二御隠居様一御目録金弐百疋仲間一統頂戴被二仰付一候旨、西浦惣左衛門申渡候

一、同年九月廿四日右為二御礼一御隠居様へ御目見申上候

一、同十三癸未年四月朔日朝鮮人来聘帰帆共御用被二仰付一候旨、豊後殿於二御宅一一統被二仰渡一候

一、同年七月廿七日三浦瀬兵衛退役被二仰付一、当分頭取役在津市左衛門と両人請持相勤候様、御用老被二仰渡一候旨、西浦惣左衛門申渡候

一、同年十月十七日朝鮮人御用被二仰付置一候へ共、右御用指支候二付御免被レ成候旨、豊後殿被二仰渡一候旨、西浦惣左衛門申渡候

一、同年十一月十六日社倉方御用被二仰付一候旨、豊後殿被二仰渡一候由、西浦惣左衛門申渡候

一、同年同月十九日御作廻方御用相勤候様服部頼母殿被レ仰候由、西浦惣左衛門申渡候

一、同年十二月十三日来春御参府御供立帰被二仰付一候旨、西浦惣左衛門申渡候

一、明和元甲申年五月九日右立帰御用御免被レ成候旨、西浦惣左衛門申渡候

一、私行年五十二歳罷成申候、以上

古家平左衛門

明和元甲申年閏十二月晦日

小泉清左衛門殿

御奉公之品書上

一、明和元甲申年十二月迄之儀は書上置申候

一、同二乙酉五月十五日於二西御丸一新田方御勘定所御用定役被二仰付一候旨、土倉市正殿被二仰渡一候

一、同三丙辰(イヌ)年九月廿七日作廻方御用社倉方ハ一所請込可レ申旨、御用老被レ仰候由、宮坂舎人殿相移候由、小泉清右衛門申渡候

一、同年十一月十五日江戸御堀浚御手伝御用被レ為レ済、御満足思召候、就は骨折候旨御意被二成下一旨、小川弥七郎被二申渡一候

一、同四丁亥年正月廿八日御加増拾俵被レ下候旨、於二御評定所一池田主殿殿被二仰渡一候

一、同年六月十六日御加増頂戴之御礼干肴を以申上候

一、同年十月廿八日於二御城一御家督御祝義御料理一統頂戴御目見申上候

一、同五戊子年正月廿八日御疱瘡為二御祝義一御目録頂戴被二仰付一候

一、同年三月十一日御家督御書替并御加増御黒印頂戴仕候

一、同年九月十三日御作廻方御用二付、大坂へ被レ遣候旨用意次第可レ致二出立一旨、御用老被レ仰候由、小川弥七郎被二申渡一候

一、同年九月十六日右御用二付岡山出立、十月十六日帰着仕候

一、同六己丑年十二月朔日於二御城一御作廻方御用出精骨折候旨御意候上、御上下頂戴被二仰付一候旨、池田主殿殿被二仰渡一候

一、同年十二月十五日右二付、御通掛御礼申上候

一、私儀行年五十七歳罷成申候

已上

古家平左衛門

明和六己丑年十二月

森半左衛門殿

佐々重郎左衛門殿

此已後平左衛門御奉公之分ハ前二記

是より清作御奉公書

御奉公之品書上

一、先祖并御奉公之儀は同姓平左衛門より書上置申候

一、私儀宝暦九己卯年九月八日御勘定所浮米之内より三人御扶持被レ下見習被二仰付一候旨、隼人殿被二仰渡一候由、西浦惣左衛門申渡候

一、同十二壬午年五月廿一日御隠居様御祝年御祝義、於二御勘定所一御料理頂戴仕候

一、同年九月十六日右御祝義二付、従二御隠居様一御銀弐両頂戴仕候

一、同年十月十五日並之通被レ下御勘定所御雇被二仰付一候旨、西浦惣左衛門申渡候
一、同十三癸未年十二月廿八日三拾俵三人御扶持被レ下、次勘定被二召出一候旨隼人殿被二仰渡一候由、西浦惣左衛門申渡候
一、私儀行年十八歳二相成申候

已上

明和元甲申年閏十二月晦日　古家平左衛門　印判　書判

小泉清左衛門殿

一、明和元甲申年閏十二月迄之儀は書上置申候
一、同三丙戌年十二月廿三日来亥年江戸御留守詰被二仰付一候旨、小泉清右衛門申渡候
一、同四丁亥年四月朔日岡山発足仕同月十七日江戸到着仕候
一、同年十二月十三日江戸於二御館一御家督御祝義御料理一気頂戴仕候
一、同年同月廿八日於二江戸一御用多出情相勤候付、格別金子百疋頂戴被二仰付一候旨、津田八左衛門申渡候
一、同五戊子年正月廿一日御疱瘡被二相済一候付、為二御祝義一御銀弐両頂戴仕候
一、同年三月十二日御黒印初て頂戴仕候
一、同年四月廿二日江戸出立仕五月十二日帰着仕候
一、御勘定所常御用相勤申候
一、私行年廿三歳二罷成申候

已上

明和六己丑年十二月晦日　古家　清作　印判　書判

森　半左衛門殿
佐々重郎左衛門殿

明和六己丑年十二月晦日迄之御奉公之品は其節書上置申候
一、明和八辛卯年三月十六日御隠居様七十御賀為二御祝義一御銀弐両頂戴仕候
一、安永元壬辰年十二月廿五日来巳年江戸御留守詰被二仰付一候
一、同二癸巳年閏三月廿一日岡山発足仕、四月九日江戸着仕候
一、同三甲午年二月信濃守様院使御馳走御用被レ為レ蒙レ仰、右御入用筋之義諸事見居役馬場紋五郎ゑ被二仰付一、浅草御屋敷并御馳走所ゑ相詰候、同人

留守中諸事御用向引請相勤候様ニ被ニ仰付一候旨、松原平右衛門於ニ御小屋一同人申渡候、右御馳走御用三月十五日被レ為レ済、同日迄相勤申候

一、同年四月廿七日江戸出立仕、五月十六日岡山ヘ帰着仕候

一、右之外御勘定所常御用相勤申候

一、私行年廿八歳ニ罷成申候

古家　清作

安永三甲午年十二月廿九日

森　半左衛門殿

小崎半兵衛殿

梶浦　勘助殿

御奉公之品安永三甲午年十二月廿九日迄之義は前々書上置申候

一、安永六丁酉正月廿三日御切米拾俵壱人御扶持御増被レ下、御中小性御取立被レ成御勘定方被ニ仰付一候旨、於ニ御評定所一土倉市正被ニ申渡一候

一、同年六月朔日右改御礼鳥目を以申上候

一、同年十二月廿三日来戊年江戸御供被ニ仰付一候旨、小崎半兵衛申渡候

一、安永戊戌年三月十一日御供ニ て御国罷立、同月廿九日江戸へ着仕候

一、同年三月十六日御加増御加扶持之御黒印江戸留守ニ付、代判を以頂戴仕候

一、同八己亥年三月廿六日殿様御痔疾ニ付例之御時節難レ被レ遊ニ御発駕一、依レ之御倹約旁御供方之衆先休足御待被レ成、出府之義は追て被ニ仰出一候、御用相済次第四月中出立可レ致旨、松原平右衛門申渡候

一、同年四月十二日江戸罷立、同月廿九日御国ヘ着仕候

一、右之外御勘定所常御用相勤申候

一、私行年三十三歳ニ罷成申候

已上

古家　清作

安永己亥年十二月廿九日

小崎半兵衛殿

梶浦　勘助殿

亡父同姓平左衛門御奉公之品、安永八己亥年迄之義は前々書上申候、同九庚子年正月より天明四甲辰年十二月迄、同人義御勘定所常御用相勤申候、外

ニ書上申品無ニ御座一候、同年十二月廿五日七十二歳ニて死去仕候ニ付私より書上申候

私御奉公之品安永八己亥年十二月廿九日迄之儀は前ニ書上申候

一、安永九庚子年十二月九日来丑年寄方請込被ニ仰付一候旨、梶浦勘助申渡候

一、天明二壬寅年十二月九日来卯年江戸詰被ニ仰付一候旨、梶浦勘助申渡候

一、同三癸卯年二月十一日御国罷立、同廿八日江戸ヘ着仕候

一、同年十月廿二日御作廻方御用ニて御国ヘ立帰被ニ仰付一候旨、池田民部被ニ申渡一候由、辻六郎太夫申渡候、同廿五日江戸罷立十一月七日大坂ヘ着仕、広内権右衛門出張ニ付御用之趣申達置、同九日同所罷立、同十二日御国ヘ着仕御用之趣梶浦勘助ヘ申達、同十六日御国罷立、十二月朔日江戸着仕候

一、同四甲辰年閏正月朔日信濃守様ヘ此度院使御馳走御用被レ為レ蒙レ仰候ニ付、御馳走中諸事御入用筋見届役被ニ付置一候様御頼被レ成候、依て右御用被ニ仰付一候間、大内弥五兵衛申談相勤候様、池田民部被ニ申渡一候旨、辻六郎太夫申渡候

一、右同日より信濃守様御屋敷ヘ相詰相勤申候、院使御逗留中伝奏御屋敷ヘも相詰、已後信濃守様御屋敷ヘ通ひ相勤、三月二日迄ニ右御用相済申候

一、同年三月五日江戸罷立、同廿一日御国ヘ帰着仕候

一、同年十二月九日寄方請込被ニ仰付一候旨、辻六郎太夫申渡候

一、右之外御勘定所常御用相勤申候

一、私行年三十八歳ニ罷成申候

已上

古家　清作

天明四甲辰年十二月廿九日

梶浦勘助殿

辻六郎太夫殿

御奉公之品天明四甲辰年十二月廿九日迄之儀は前ニ書上申候

一、天明五乙巳年二月十六日亡夫平左衛門跡目御知行百三拾石之内、御切米六拾俵四人御扶持被レ下、其儘勘定方御中小性被ニ指置一候旨、土倉市正被ニ申渡一候由、辻六郎太夫於レ宅同人申渡候

一、天明六丙午年三月十八日御黒印於二御評定所一頂戴仕候
一、同七丁未年六月廿九日名倉勝六跡家屋敷替被二仰付一候旨、御用老被レ仰候由、辻六郎太夫相移申候
一、同年十月九日守屋清左衛門御作廻方御用大坂立帰被二仰付一候、右留守中新田方御用諸事請持相勤候様、御用老被レ仰候由、辻六郎太夫申渡相勤申候
一、同八戊申年十月八日守屋清左衛門三宅平助御作廻方御用大坂立帰被二仰付一、右留守中新田方御用諸事請持相勤候様御用老被レ仰候由、高桑忠右衛門申渡相勤申候
一、寛政元己酉年正月廿四日今年御巡見御越二付、右御用取計被二仰付一候旨、於二御勘定所一高桑忠右衛門申渡相勤申候
一、同年十二月十一日来戌年江戸御供被二仰付一候旨、高桑忠右衛門申渡候
右之外御勘定所常御用相勤申候
一、私行年四十三歳二罷成申候
已上

寛政元己酉年十二月晦日　古家　清作　印書判
高桑忠右衛門殿

御奉公之品寛政元己酉年十一月晦日迄之儀は前々書上申候
一、寛政二庚戌年二月十八日岡山被レ遊二御発駕一御供二て出立仕、三月六日江戸え着仕候
一、同年七月十二日御道中御用骨折御〆りも付御入用少彼是骨折候二付、御目録金千弐百疋頂戴被二仰付一候旨、瀧川弥右衛門申渡候
一、寛政二庚戌年十二月廿八日今年御目見御元服御任官之節御用向彼是骨折相勤候二付、御目録金子三百疋頂戴被二仰付一候旨、中村主馬申渡候由、野村藤右衛門申渡候
一、同三辛亥年正月廿四日此度山城守様へ伝奏院使御馳走御用被レ蒙レ仰候二付、右御入用筋其儀諸事見届役被二附置一候、別て心ヲ付可二相勤一旨、土倉四郎兵衛被二申渡一候由、中村主馬より相移候旨、野村藤右衛門申渡候、御屋敷え日々通ひ相勤申候
一、院使御道中より御病気二て御帰路被レ成候由、

山城守様右御馳走御用御免被レ蒙レ仰候付、私義も三月廿六日右御用御免被レ成候、然ル所御用意物等御入用高惣〆リ相済申候迄通ひ相勤候様ニとの義ニ付、四月十三日迄相勤申候

一、寛政三辛亥年正月廿六日若殿様御帰国御供被ニ仰付ニ候旨、野村藤右衛門申渡候

一、同年四月十七日去年已来御祝義事度々有レ之、御用向骨折御借入等之儀別て心ヲ付相勤候付、御紋付御上下頂戴被ニ仰付ニ候旨、土倉四郎兵衛被ニ申渡ニ候由、野村藤右衛門申渡候

一、同三辛亥年四月十九日若殿様御供ニて江戸出立仕、五月八日岡山え帰着仕候

一、同年七月二日御道中御用骨折候付、御目録金子二百疋頂戴被ニ仰付ニ候旨、品川勝右衛門申渡候

一、同四壬子年三月廿九日寄奉行相勤候様被ニ仰付ニ候旨、高桑忠右衛門申渡候

一、同六甲寅年十一月五日守屋清左衛門三宅平介御作廻方御用大坂立帰参候付、右留守中当分仮役被ニ仰付ニ候旨、長谷川務右衛門申渡候

一、同年閏十一月三日来卯年頭より平左衛門と変名仕度旨奉レ願候処、願之通勝手次第と被ニ仰出ニ候

右之外御勘定所常御用相勤申候

一、私行年四十八歳罷成申候

已上

古家　清作

寛政六甲寅年十二月廿九日

高桑忠右衛門殿

長谷川務右衛門殿

辻　六郎太夫殿

御奉公之品寛政六甲寅年十二月廿九日迄之義は前々書上申候

一、寛政八辰年三月五日御代替御書替御黒印頂戴仕候

一、同年十二月廿四日来巳ノ年江戸詰被ニ仰付ニ候旨、辻六郎太夫申渡候

一、同九巳年三月十一日岡山出立仕、四月五日江戸着仕候

一、同年十二月晦日江戸於ニ御館ニ晴姫様御祝用骨折相勤候ニ付、御目録金子弐百疋頂戴被ニ仰付ニ候旨、池田伎門申渡候

一、同十午年四月六日去年来御用向骨折出精相勤候

ニ付、御目録金子三百疋頂戴被ニ仰付一候旨、伊木木工申渡候

一、同年四月七日江戸出立仕、五月二日岡山ヘ帰着仕候

一、同年十二月九日来未年寄奉行相勤候様被ニ仰付一候旨、水野七郎左衛門申渡候

右之外御勘定所常御用相勤申候

一、私行年五十三歳ニ罷成申候

古家平左衛門

寛政十一己未年十二月晦日

水野七郎左衛門殿

御奉公之品寛政十一己未年十二月晦日迄之書上は水野七郎左衛門ヘ指出シ置申候

一、寛政十二庚申年閏四月廿日堀治三郎御作廻方御用大坂立帰被ニ仰付一候ニ付、右留守中新田方御用請持被ニ仰付一候旨、水野七郎左衛門申渡候

一、同年十月十日吉田修蔵不快中御勘定所頭取役并上聞共当分請持被ニ仰付一候旨、水野七郎左衛門申渡候

一、同年十一月十九日吉田修蔵致ニ死去一候付、御勘定所頭取役并上聞共其儘受持被ニ仰付一候旨、水野七郎左衛門申渡候

一、享和元辛酉年五月十二日迄御勘定所頭取役并上聞共請持相勤申候

一、同年五月十三日御勘定方数年無ニ懈怠一相勤候ニ付、格別御小性組被ニ仰付一候旨、日置元八郎被ニ申渡一候

一、同年同月同日悴同姓巳之介義並之通被レ下、御勘定方御雇被ニ仰付一候旨、水野七郎左衛門申渡候

一、同年六月十五日御小性組被ニ仰付一候、改御礼申上候

一、同年御番御供相勤申候

一、同二壬戌年御発駕被レ遊候已後御留守番相勤申候

一、同三癸亥年御帰城被レ遊候以後御番御供相勤申候

一、文化元甲子年御発駕被レ遊候已後御留守番相勤申候

一、私行年五十八歳罷成申候

古家平左衛門

文化元甲子年十二月晦日

小川九郎兵衛殿